Essay

秋田の町について思うこと

日本博物館協会会長・千葉市美術館館長　**山梨絵美子**
（昭和52年卒・旧姓 榊田）



やまなし・えみこ/日本博物館協会会長。千葉市美術館館長。秋田市生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業、同大学院博士課程後期美術史専攻単位取得中退。専門は日本近代美術史。1984年東京国立文化財研究所（現：国立文化財機構東京文化財研究所）研究員。2021年同所副所長を定年退職。2022年全国美術館会議理事。著書に『黒田清輝《智・感・情》』ほか多数。

大学進学のために秋田を出てから半世紀近くたつ。その後、秋田の町は都市化が進み、駅舎も新しくなり、駅前にあった金座街がなくなって、大規模な商業施設に変わったほか、一九七〇年代の広小路、通町、川反、大町といった旧市内のにぎわいが、秋田駅東口開発ほかの町の拡大によって、他地域にも移っているように思う。

変化しつつも歴史の痕跡が蓄積されている町には趣がある。高度成長期、科学と技術の進歩によって高層ビルが次々に建てられ、戦前までの建物が壊されていく中で、スクラップ・アンド・ビルドを是とする考え方に警鐘を鳴らす動きが日本近代建築史家を中心として高まった。

町の風格や地域の魅力は歴史の痕跡によってつくられるものであるという理解が広まり、将来、文化財と価値づけられる可能性のある建造物は登録文化財として保護対象とする国の制度が出来て、日本各地の戦前の名建築の保存・活用につながった。また、近年は丹下健三ほか戦後に活躍し、世界でも評価を得た建築家たちの作品をも長く残そうとする意識が生まれている。

秋田も冒頭に述べたように変わってきてはいても、赤レンガ郷土館（旧秋田銀行本店）のような魅力的な近代建築や、各種の商家のにぎわいを思わせる通町の金子家住宅などが残され、活用されている上に、江戸時代の城跡で太平山を望む千秋公園を中心に、文化施設のまとまった区域があり、歴史と文化が感じられるのが魅力的だ。

千秋公園内にあった秋田市立美術館がアトリオンに移転して秋田市千秋美術館に、中土橋を渡った右側にあった秋田県立美術館・平野政吉美術館が移転して安藤忠雄設計の秋田県立美術館になり、県民会館はミルハスに生まれ変わった。佐竹史料館も令和7年にリニューアルオープン、秋田県立美術館の移転前の建物が秋田市に移管されて文化創造館として保存・活用されているのも、秋田の博物館・美術館の歴史として重要である。私にとって、この建物は、藤田嗣治をはじめ、ピカソ、マティスらの作品と初めて出会った場所であり、館内にあった館長室で平野政吉氏に藤田のことやご所蔵の秋田蘭画の話を伺った思い出の場所でもある。移転はしたものの、藤田の「秋田の行事」の前に立つと、そうした思い出とともに「帰ってきた」という思いに浸る。

そうした意味で、博物館や美術館はその土地の記憶のよりどころであるとともに、次世代・次々世代の人々へのメッセージを込めた贈り物でもあって、私自身もその恩恵に浴していると感じる。デジタル時代が進んでも、人間に体がある限り、先人が直接に触れた文書や道具、創意工夫や美の産物が、これからも人々に生きる力や安らぎの源になるに違いない。秋田の町の魅力が未来までも伝えられていくよう願っている。



金子家住宅



佐竹史料館



「STORY」2026年1月号/光文社